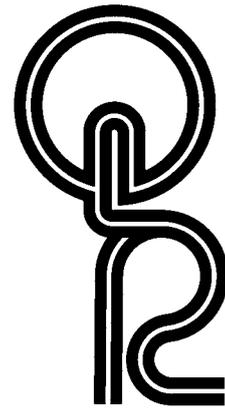


# QR Newsletter



## 第四紀通信

Vol. 17 No.4, 2010



Active Tephra 2010 の One-Day Trip (2010 年 5 月 12 日) において桜島東麓の地獄河原から眺めた噴火。当日午前中はほぼ静穏であったが、桜島昭和火口に最も近づいたラハール堆積物観察中の午後 2 時 15 分頃、突如噴火が起きた。写真は噴煙とそれを見あげる One-Day Trip 参加者。(鈴木毅彦 撮影)

Vol. 17 No. 4

August 1, 2010

総会のお知らせとお願い・・・・・・・・・・2	2010 年学会賞・学術賞受賞者
大会案内 (第 4 報)・・・・・・・・・・2	講演会案内・・・・・・・・・・16
猿橋賞募集・・・・・・・・・・13	シンポジウム報告・・・・・・・・・・16
2010 年学会賞・学術賞、論文賞・奨励賞の決定のお知らせ・・・・・・・・14	Active Tephra 2010 報告・・・・・・・・18
名誉会員推薦報告・・・・・・・・・・15	講習会案内・・・・・・・・・・23
2009 年学会賞・学術賞受賞者	幹事会議事録・・・・・・・・・・23
講演会報告・・・・・・・・・・15	評議員会議事録・・・・・・・・・・23
	会員消息・・・・・・・・・・24
	尾瀬賞募集・・・・・・・・・・24

## ◆日本第四紀学会総会のお知らせとお願い

8月21日(土)、東京学芸大学にて2010年度総会が開催されます。会員各位のご出席をお願い申し上げます。やむを得ず欠席される場合には、委任状(とじ込みのはがきまたはファックス)を必ずご提出下さい。委任状をはがき・ファックスで送付される場合には、8月16日(月)必着でお願い致します。

なお、学会のメーリングリストにメールアドレスを登録頂いている方(最近不達メールが増えておりますので、アドレス変更等をされた場合は速やかに事務局にお届け下さい)には、メールでの委任状提出について後日ご案内させていただきますので、こちらについてもどうぞご活用下さい。

FAX: 03-5291-2176 日本第四紀学会事務局宛

### 総 会 委 任 状

2010年 月 日

日本第四紀学会 2010年度総会議長殿

私は議長(または 氏)を代理人と定め、日本第四紀学会  
2010年度総会におけるいっさいの議決を委任します。

氏 名 ( ) (署 名)

所 属 ( )

## ◆日本第四紀学会 2010年大会案内 (第4報)

### 第3報から変更があります(下線部)

#### 1. 開催地および日程の概要

会場: 東京学芸大学 芸術館ホールほか(東京都小金井市貫井北町4-1-1)

<http://www.u-gakugei.ac.jp/>

日程:

- 8月20日(金) 一般研究発表(口頭およびポスター)・評議員会
- 10:00-11:00 一般研究発表(オーラルセッション 0-1~0-4): 芸術館ホール
- 11:00-11:15 休憩
- 11:15-12:00 一般研究発表(オーラルセッション 0-5~0-7)
- 12:00-13:00 昼食・休憩・幹事会
- 13:00-14:30 ポスターセッション コアタイム(1): 芸術館ロビー
- 14:30-15:30 一般研究発表(オーラルセッション 0-8~0-11)
- 15:30-15:45 休憩
- 15:45-17:00 一般研究発表(オーラルセッション 0-12~0-16)
- ポスター掲示時間 10:00~17:00(芸術館ロビー)
- 17:00-19:00 評議員会: 本部棟3階 第一会議室

8月21日(土) 一般研究発表(口頭およびポスター)・総会・表彰状授与式・学会賞・学術賞  
受賞者講演会・懇親会

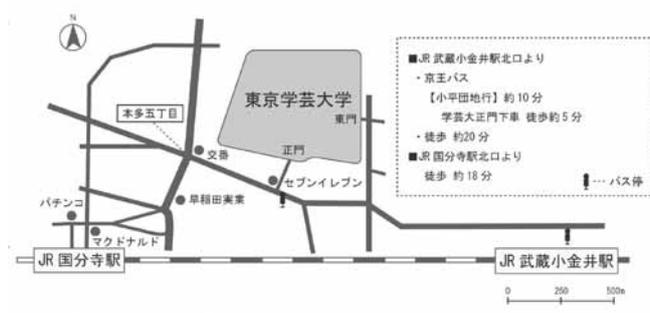
- 9:30-11:00 一般研究発表（オーラルセッション O-17～O-22）：芸術館ホール  
 11:00-11:45 総会：芸術館ホール  
 11:45-11:50 休憩  
 11:50-12:30 表彰状授与式：芸術館ホール  
 12:30-13:30 昼食・休憩  
 13:30-14:15 ポスターセッション コアタイム（2）：芸術館ロビー  
 14:15-15:45 一般研究発表（オーラルセッション O-23～O-28）  
 15:45-16:00 休憩  
 ポスター掲示時間 9:30～16:00（16:00までに撤収）（芸術館ロビー）  
 16:00-17:25 学会賞・学術賞受賞者講演会：芸術館ホール  
 18:00-20:30 懇親会：環境教育実践施設多目的室（予定；当日ご案内します）

- 8月22日（日）公開シンポジウム（全日）「自然史の教育と研究をすすめるために一さまざまな分野からの取り組み」（講演およびポスターサロン）  
 10:00-12:00 第1部 自然史研究の視点（講演 S-0～S-5）：芸術館ホール  
 12:00-12:45 昼食・休憩  
 12:45-13:45 ポスターサロン（1）：第1むさしのホール  
 13:45-14:15 第2部 防災人形劇上演：芸術館ホール  
 14:20-16:00 第2部 自然史教育の様々な方法（S-6～S-10）：芸術館ホール  
 16:00-16:05 休憩  
 16:05-16:30 総合討論  
 16:40-18:00 ポスターサロン（2）：第1むさしのホール

8月23日（月）巡検「里山景観の違いを探るー地生態学の視点からー」

## 2. 会場案内

### ○東京学芸大学へのアクセス



### ○会場周辺地図



### ○宿泊

東京都内には多くのホテルがありますので、宿泊の予約は各自でおこなってください。

## 3. 口頭発表要領

- 会場には Windows (OS, Windows XP) パソコンに接続した液晶プロジェクターを用意します。Adobe Reader 9、Microsoft PowerPoint Viewer2007、OpenOffice.org Impress を用いた発表が可能です。Mac で作成の方は、あらかじめ Windows パソコンで動作確認をお願いします。
- ファイル名に講演番号をつけたデータファイルを USB メモリー等（ウイルスの感染のないもの）に入れ、会場の担当者までお持ちください。初日の午前中の方は、9:00～9:30 に、午後の方は 13:30～14:00 に、2日目午前の方は 8:45～9:00 もしくは前日に、担当者までお持ちください。
- 上記以外のソフト、またはご自分のパソコンの使用を希望される場合には、ご自分のパソコ

- ンを持参して、接続してください。
- Mac 使用の方は、コネクタをご持参下さい。
- OHP はございません。書画カメラのご使用を希望する場合は、あらかじめ大会実行委員会事務局 目代 (mokudai(at)pro-natura.jp) までご相談ください。

#### 4. ポスターセッションの発表要領

- ポスターは大会期間中の8月20日10:00～17:00、8月21日9:30～16:00まで掲示できます。会場は芸術館ロビーです。
- ポスターセッションコアタイム：8月20日13:00～14:30、および8月21日13:30～14:15を説明時間帯に設定しています。
- ポスターセッションのショートサマリー発表は廃止しました。
- ポスターのボード面積は1題あたり、縦180cm、横90cmです。ポスターをとめる画鋏やテープなどは会場で用意します。
- ポスターには、発表番号・発表題名・発表者名をポスターのタイトルとして明記してください。発表番号は、プログラムを参照してください。
- ポスター会場でコンピューターなどの使用や、画鋏等で掲示できない重量物等の展示を希望される方は、大会実行委員会事務局 目代 (mokudai(at)pro-natura.jp) まで連絡してください。

#### 5. シンポジウムのポスターサロン出展要領

- ポスターサロンの時間・場所は以下の2回です。  
12:45-13:45 ポスターサロン (1) (会場：第1むさしのホール) 準備は11:00より可  
16:40-18:00 ポスターサロン (2) (会場：第1むさしのホール)
- 掲示スペースは、縦180cm、横90cmです。ポスターをとめる画鋏やテープなどは会場で用意します。
- 18:00以降、すみやかに掲示物の撤収をお願いいたします。残っている掲示物等は大会実行委員会で処分いたします。
- パンフレットの配布、実物の展示、PCでの映像上映などを行う場合、机、いすが使用できます。ご希望の場合は、大会実行委員会事務局 目代(mokudai(at)pro-natura.jp)までご連絡ください。
- PCにはAC電源を利用できませんので、バッテリーをご利用ください。スペースの関係で、プロジェクターによる映像の上映はできません。PCのモニターで対応をお願いいたします。
- その他の機器、スペースの使用につきましては大会実行委員会事務局 目代 (mokudai(at)pro-natura.jp) までご相談ください。
- 16:40-18:00のポスターサロン2(会場：第1むさしのホール)では、ビールやソフトドリンクの販売を行います。飲み物を片手に、お気軽にぎっくばらんな雰囲気でご参加ください。

#### 6. 参加費・懇親会申し込み等

- 大会参加費として、会員・非会員を問わず2,000円を申し受けます。当日会場の受付にてお支払いください。ただし、70歳以上の会員と学部学生、シンポジウム依頼講演者は無料です。
- 8月22日のシンポジウムは一般公開とし、会員・非会員を問わず参加費は無料です。
- 講演要旨集は、会場で直接販売いたします(予定価格2,000円)。大会終了後の入手方法につきましては事務局へお問い合わせください。  
(株)春恒社 学会事業部内 日本第四紀学会事務局  
E-mail: daiyonki(at)shunkosha.com  
Tel: 03-5291-6231、Fax: 03-5291-2176
- 人数を把握するため懇親会に参加される方は事前の申し込みをお願いします。  
日時：8月21日(土)18:00～20:30  
会場：環境教育実践施設多目的室(予定)  
参加費：一般 5,000円(予約)(当日は6,000円)、学生 2,500円  
予約：8月10日(火)までに、電子メールまたはFaxで大会実行委員会事務局 和田までご連絡ください。

E-mail : ulmusdav(at)u-gakugei.ac.jp

Fax : 042-329-7874 (東京学芸大学コカ・コーラ教育・環境財団寄附講義事務局 和田あて)

## 7. 巡検

- テーマ「里山景観の違いを探るー地生態学の視点からー」
- 日程：8月23日(月)日帰り
- 案内者：増沢有葉(科学技術振興機構)・小泉武栄(東京学芸大学)・辻村千尋(日本自然保護協会)
- 趣旨：関東平野西縁部の里山景観は地域ごとに特性がみられる。今回の巡検では秋留台地、加住丘陵、五日市丘陵の里山景観の地域特性について、植生・地形・地質といった自然環境要素や、それらに基づく人間の生活様式・生産活動、歴史などを包括的に観察し、その関連性(成立要因)について考察する。
- 巡検の概要とスケジュール：
  - 9:00 JR 五日市線東秋留駅集合(8:44 拝島駅発武蔵五日市駅行きに乗って下さい)
    - ・二宮神社(台地上の湧水)
    - ・前田耕地遺跡(縄文草創期～平安時代の台地上の水田遺跡)
    - ・秋川の霞堤
    - ・加住丘陵切欠地区(礫層からなる里山；カタクリの分布する沖積錐)
    - ・五日市丘陵横沢入地区(第三系頁岩からなる里山；水気の多い谷津田環境)
  - 16:00 頃 JR 五日市線武蔵増戸駅解散
- 移動は、徒歩と電車です。途中、店はありませんので、昼食は持参してください。天候および交通事情等により若干の変更もあります。
- 募集人員：30名程度(10名未満の場合は中止)
- 参加費：500円(資料代と保険代。電車代や昼食代は各自ご負担下さい)
- 申し込み方法：参加希望者は、E-mailにて、氏名・所属・連絡先(住所・電話・メールアドレス)、定員オーバーの場合のキャンセル待ち希望の有無をご連絡ください。先着順に受け付けます。なお、電話やFAXでの申し込みは受け付けません。定員に達し次第、受付終了とさせていただきます。
- 申し込み先：tsujimura(at)nacsj.or.jp (財)日本自然保護協会 辻村千尋
  - ・受付後に個別に案内等を送付します。
  - ・参加の確認と参加費の徴収および巡検資料の受け渡しは、学会期間中に巡検コーナーを設けて行う予定です。
  - ・巡検のみ参加される方は、申し込み時にその旨をお書き添えください。
- 申し込み締め切り：7月30日(金)18時

## 8. 大会実行委員会および連絡先

実行委員会委員長 小泉武栄(東京学芸大学)  
 実行委員会事務局長 目代邦康 mokudai(at)pro-natura.jp  
 (財)自然保護助成基金  
 〒150-0046 渋谷区松濤1-25-8 松濤アネックス2F  
 Tel. 03-5454-1789 / Fax. 03-5454-2838

## 9. プログラム詳細

### 第1日 2010年8月20日(金)

口頭発表会場：芸術館ホール  
 ポスター会場：芸術館ロビー

### 口頭発表(連名の場合は筆頭者が発表)

- 0-1 10:00-10:15 ハッ場ダム建設による土砂災害リスク……竹本弘幸(拓殖大)
- 0-2 10:15-10:30 球状炭化粒子を用いた過去の大気汚染被害地域の推定ー三重県四日市地域を例としてー……磯嶋光一郎(早稲田大)・石渡真己(東芝)・北瀬(村上)晶子・香村

## 2010年大会案内

一夫（早稲田大）

- 0-3 10:30-10:45 OSL強度から求められる長石の露光率を用いた新潟県海岸部における砂の運搬過程の解明……林崎 涼・白井正明（首都大）・劉 海江・佐藤慎司（東京大）  
0-4 10:45-11:00 小型平面水路での河川流路形態の3次元復元……岡崎浩子（千葉県立中央博物館）・郭 栄珠（千葉大）・中里裕臣（農村工学研究所）

11:00-11:15 休憩

- 0-5 11:15-11:30 御前崎の地震性地殻変動を反映した過去5000年間の河川の変遷……藤原治（産総研・活断層・地震研究センター）・平川一臣（北海道大）・入月俊明（島根大）・長谷川四郎（熊本大）・長谷義隆（天草市立御所浦白亜紀資料館）  
0-6 11:30-11:45 カザフスタン・バルハシ湖流入諸河川の蛇行流路特性の検討と旧河道から導かれるイリ川の流量変化と環境変動……清水 整・須貝俊彦（東京大）  
0-7 11:45-12:00 中央アジア、バルハシ湖における珪藻分析より推定される低湖水位期の年代……千葉 崇（東京大）・遠藤邦彦（日本大）・須貝俊彦（東京大）・原口 強（大阪市大）・中山裕則（日本大）・山崎秀夫（近畿大）・荒川克弘（日本大）・窪田順平（地球研）

12:00-13:00 昼食・休憩／幹事会

13:00-14:30 ポスターセッションコアタイム（会場：芸術館ロビー）

- 0-8 14:30-14:45 アムール川中流三江平原周辺における地形形成環境変化……山縣耕太郎（上越教育大）・室岡瑞恵（北海道立網走水産試験場）・春山成子（三重大）  
0-9 14:45-15:00 Quaternary geology of Ban Thang Khong, in Amphoe Chondan north Thailand with special refernce to Archeological sites of stone tool factories……Yoshio SATO (Chulalongkorn Univ.) and Masao HASHIMOTO (Touhoku Chemical Industries Co.)  
0-10 15:00-15:15 小規模堆積物からみた八ヶ岳火山における完新世の火山活動（予報）……大石雅之（首都大）・町田尚久・竹田朋矢（立正大）  
0-11 15:15-15:30 東北地方北部、亀ヶ岡式土器に含まれるテフラガラスの化学組成について……長沢知周・柴 正敏（弘前大）

15:30-15:45 休憩

- 0-12 15:45-16:00 長野県神城盆地における完新世の局地的な環境変遷の復元……竹本仁美・奥村晃史（広島大）  
0-13 16:00-16:15 網走湖・湖底堆積物のQuercus花粉の消長にみる8.2 ka event……五十嵐八枝子（北方圏古環境研究室）・許 成基（レアックス(株)）・坂本竜彦・飯島耕一（JAMSTEC）  
0-14 16:15-16:30 晩氷期の環境変動に伴う近畿地方中部の植生変化……百原 新（千葉大）・三宅 尚（高知大）・山本浩久（岩出第2中）・沖津 進（千葉大）  
0-15 16:30-16:45 兵庫県豊岡盆地における完新世の相対的海水準変動の復元……谷川晃一郎（神戸大）・兵頭政幸（神戸大）・佐藤裕司（兵庫県立大）  
0-16 16:45-17:00 第四紀後期の東アジアにおける哺乳類の絶滅—研究の現状と課題—……河村善也（愛知教育大）

17:00-19:00 評議員会（会場：本部棟3階 第一会議室）

## 第2日 2010年8月21日（土）

口頭発表、総会、表彰状授与式、受賞者講演会（第1回）会場：芸術館ホール  
ポスター会場：芸術館ロビー

### 口頭発表（芸術館ホール）

- 0-17 09:30-09:45 第四紀の環境変動において東南極氷床変動はどのような役割を果たしてきたのだろうか？—南極内陸山地の氷河地形発達史に基づく考察—……三浦英樹・菅沼悠

- 介（国立極地研究所）・橋詰二三雄（総合研究大学院大）
- O-18 09:45-10:00 南極大陸周縁域の大陸棚深度と南極氷床の関係……奥野淳一・三浦英樹・野木義史（国立極地研究所）
- O-19 10:00-10:15 北半球大陸氷床の出現・発達期における北大西洋の氷山サージ……林 辰弥（国立科学博物館）・大野正夫・小松史樹（九州大学）・Gary Acton（カリフォルニア大デービス校）・Yohan Guyodo（IMPMC・France）
- O-20 10:15-10:30 発表変更（当日掲示します）
- O-21 10:30-10:45  $\alpha$  スペクトル 230Th/234U 年代による波照間島のサンゴ礁複合体堆積物の再検討……山田茂昭（株式会社日さく）
- O-22 10:45-11:00 最終氷期最盛期におけるユースタティク海水準の推定……大場忠道（北海道大）

- 11:00-11:45 総会（芸術館ホール）
- 11:45-11:50 休憩
- 11:50-12:30 表彰状授与式

- 12:30-13:30 昼食・休憩／INQUA 招致準備委員会
- 13:30-14:15 ポスターセッションコアタイム（会場：芸術館ロビー）

- O-23 14:15-14:30 相模川上流山間部の支流沢井川にみられる最終間氷期以降に形成された二つの埋没谷……笠原天生・鈴木毅彦（首都大）
- O-24 14:30-14:45 茨城県、桜川低地における協和礫層の  $^{14}\text{C}$  年代と地表地下地質構造……植木岳雪・古川竜太（産総研）・青野道夫（サンコア）・近藤玲介（産総研）・宮入陽介・松崎浩之（東京大）
- O-25 14:45-15:00 中国山地西部、錦川下流域およびその周辺部における河川争奪と地殻変動……山内一彦（山口県立岩国総合高）・白石健一郎（山口県立徳山北高）
- O-26 15:00-15:15 上総層群 Ks5 テフラの酸素同位体層序における層位……中里裕臣（農研機構）・佐藤弘幸（静岡聖光学院高）
- O-27 15:15-15:30 東京都杉並区で掘削された和田堀公園コアに挟在する宮田タフとその層位に基づく武蔵野台地南東部地下の上総層群の地質構造……村田昌則・鈴木毅彦（首都大）・川島眞一・川合将文（東京都）
- O-28 15:30-15:45 新第三紀・第四紀境界の東海層群から産出した昆虫化石……森 勇一（金城学院大）

- 15:45-16:00 休憩

### 2010年学会賞・学術賞受賞者講演会（第1回）

- 16:00-16:40 多田隆治（学会賞受賞者）「日本海堆積物を用いた第四紀東アジアモンスーンに関する研究」
- 16:45-17:25 鈴木毅彦（学術賞受賞者）「テフラ対比に基づく中部～東北地方の火山噴火史および古地理復元に関する研究」

- 18:00-20:30 懇親会（会場：環境教育実践施設多目的室を予定）

### ポスター発表（会場：芸術館ロビー）

- P-1 高原野菜生産地域における畑下層土と硝酸性窒素による地下水汚染の関係—群馬県赤城山麓・浅間山麓を例として—……吉良彰悟・宮田昌幸・中川原宏昭・北瀬（村上）晶子・香村一夫（早稲田大）
- P-2 黒ボク土中の微粒炭と森林火災・火入れ跡から採取した炭の反射率の比較—黒ボク土中の微粒炭の起源とタフオノミーについて—……井上 淳（大阪市立大）・井上 弦（九州大）
- P-3 堆積性土壌の植物珪酸体と微粒炭分析による奈良県曾爾高原での草原と火の歴史……奥中亮太（大阪市立大）
- P-4 鳥取県伯耆町井後草里遺跡（Tr5）の微粒炭分析……小椋純一（京都精華大）

- P-5 鳥取県西部、井後草里遺跡の植生変遷……渡辺正巳（文化財調査コンサルタント（株））・松本直子（岡山大・社会文化科学研究科）・別所秀高（鴻池新田会所）
- P-6 関東平野における最終氷期末期以降の植生変遷と照葉樹林の進出・拡大……西内李佳（日本大）・鈴木 茂（パレオラボ）・遠藤邦彦（日本大）
- P-7 関東平野西縁部丘陵地における里山景観の地域特性とその成立要因に関する地生態学的研究……増沢有葉（科学技術振興機構）・小泉武栄（東京学芸大）
- P-8 茨城県陸平貝塚におけるモグラのトンネル掘り活動による遺物の埋没後移動……亀井 翼（首都大）
- P-9 伊豆諸島遺跡出土縄文土器の化学的胎土分析研究—伊豆大島下高洞遺跡・八丈島倉輪遺跡—……松本建速（東海大）・市川慎一郎（明治大）・中村利廣（明治大）
- P-10 南関東地方の立川ローム層最下部石器群と層序……比田井民子・上條朝宏・鈴木次郎・畠中俊明（東京都埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団）
- P-11 中央アジア、バルハシ湖東湖における完新世の堆積環境変動—2009年コア分析速報……須貝俊彦（東京大）・遠藤邦彦（日本大）・原口 強（大阪市大）・門谷弘基・千葉 崇・清水 整（東京大）・近藤玲介（産総研）・中山裕則・佐藤明夫（日本大）・山崎秀夫（近畿大）・窪田順平（地球研）
- P-12 北海道東部釧路湿原 D1 コアの堆積学的検討……高清水康博・阿部佑一（新潟大）
- P-13 木崎湖の底質と堆積機構：長野県北部の自然災害研究の基礎資料として……伊藤拓馬（長野市立戸隠地質化石博物館）
- P-14 沈降域における沖積層を用いた融氷パルス 1b の検証……田辺 晋（産総研）・中西利典（KIGAM）・安井 賢（甲賀地盤調査）
- P-15 琵琶湖の拡大期付近における烏丸コアのテフラ対比再検討……里口保文（琵琶湖博物館）
- P-16 岡山県更新統蒜山原層に記録された洪水・湖底斜面崩壊イベントの周期性……佐々木泰典・弓真由子・石原与四郎（福岡大）・斎藤めぐみ（科博）・成瀬 元（千葉大）・宮田雄一郎（山口大）
- P-17 南極ウィルクスランド沖海底コア中の放散中化石に基づく古環境復元……斉藤貴之（日本大）・松岡東香（筑波学院大）・藤井由加里・遠藤邦彦（日本大）・横山美穂・酒井英男（富士大）
- P-18 海洋酸素同位体ステージ 21 と更新世中期気候変換期—大阪湾の堆積物コアから得られた気候変化と海水準変動—……北場育子・原田麻央・兵頭政幸（神戸大）・佐藤裕司（兵庫県立大）・加藤茂弘（人と自然博）・松下まり子（奈文研）
- P-19 北海道北部、利尻島南部・東部における火山麓扇状地の年代資料……近藤玲介（産業技術総合研究所）・塚本すみ子（Leibniz Institute）・宮入陽介（東京大）・坂本竜彦（海洋研究開発機構）・遠藤邦彦（日本大）
- P-20 茨城県常陸台地における下総層群の主要テフラとその対比……大井信三（国土地理院）・横山芳春（アースアプレイザル）・安藤寿男（茨城大）
- P-21 コンピュータシミュレーションを用いた断層撓曲と断層パラメータの解明……安藤広一・山崎晴雄（首都大）

### 第3日 2010年8月22日（日）

#### 公開シンポジウム

#### 「自然史の教育と研究をすすめるために—さまざまな分野からの取り組み」

講演会場：東京学芸大学芸術館ホール

ポスターサロン会場：第1むさしのホール

#### 講演（芸術館ホール）

10:00-10:05 趣旨説明 目代邦康（自然保護助成基金）

#### 第1部 自然史研究の視点

S-1 10:05-10:20 自然史教育の方法：事業仕分けに対抗し、持続可能で安心・安全な社会を構築するために……植木岳雪（産総研）

S-2 10:20-10:45 カタクリとシデコブシを用いた自然史教育……小泉武栄（東京学芸大）

S-3 10:45-11:10 分布様式としての関越要素の存在について……牧林 功（埼玉昆虫談話会）

- S-4 11:10-11:35 さいはての島における自然史ネットワーク……佐藤雅彦（利尻町立博物館）  
 S-5 11:35-12:00 ジオパーク活動に第四紀研究の果たす役割……町田 洋（都立大名誉教授）

12:00-12:45 昼食・休憩

12:45-13:45 ポスターサロン1（会場：第1むさしのホール）……準備は11:00より可能

## 第2部 自然史教育の様々な方法

- 13:55-14:15 防災人形劇上演（2件）（会場：芸術館ホール）  
 S-6 14:20-14:40 損保ジャパンの防災CSR戦略と町火消し精神の試（私）論……児島 正（損保ジャパン・リスクマネジメント）  
 S-7 14:40-15:00 土をどう教えるか……浅野真希（筑波大）  
 S-8 15:00-15:20 郷土の自然と歴史ー普及と教材化ー……角田清美（都立北多摩高）  
 S-9 15:20-15:40 地形実験を取り入れた自然史教育……池田 宏（深田地質研究所・元筑波大）  
 S-10 15:40-16:00 石器作りの体験学習と考古学……小菅将夫（みどり市立岩宿博物館）

16:00-16:05 休憩

16:05-16:30 総合討論

16:30-16:40 移動時間

16:40-18:00 ポスターサロン2（会場：第1むさしのホール）……ビール販売あり

## ポスターサロン（会場：第1むさしのホール）

（ジオパーク関係、学会および全国的活動、地域別（北から）の順になっています）

- PS-1 ジオパークにいこう 高木秀雄（早稲田大）  
 PS-2 国指定史跡と黒曜石原産地を活用したジオツアー実践例ー白滝黒曜石ジオパーク構想の取組みー……熊谷 誠（遠軽町）  
 PS-3 アポイ岳ジオパーク……岩崎正吾（北見工業大）  
 PS-4 洞爺湖有珠山ジオパーク：科学者の関わり方と役割……廣瀬 亘（北海道立総合研究機構・地質研究所）  
 PS-5 下北半島ジオパーク構想の紹介……新谷智文（むつ市）  
 PS-6 三陸海岸について（いわて三陸ジオパーク研究会の取組状況など）……伊藤 仁（岩手県）  
 PS-7 秋田県北部八峰町ジオパーク構想について……栗山将幸・林信太郎（秋田大）  
 PS-8 男鹿半島・八郎湖ジオパークをめざして……白石建雄（秋田大）  
 PS-9 磐梯山をジオパークへ……佐藤 公（磐梯山噴火記念館）・竹谷陽二郎（福島県立博物館）・長橋良隆（福島大）  
 PS-10 茨城県北ジオパークをめざして……天野一男（茨城大）  
 PS-11 地質観光情報の発信と地域振興ー茨城県北地域を例にしてー……齊藤千帆（茨城大）  
 PS-12 ジオパークを目指す下仁田町……関谷友彦（下仁田ジオパーク協議会）  
 PS-13 “日本地質学発祥の地”秩父とジオパーク……宮城 敏・江田直人（秩父まるとジオパーク推進協議会、秩父市役所）  
 PS-14 銚子ジオパーク構想の紹介……安藤生大（千葉科学大）  
 PS-15 伊豆大島ジオパーク構想紹介……大島 治（伊豆大島火山博物館）・野村昌宏（大島町役場）・白井岩仁（大島観光協会）  
 PS-16 箱根ジオパーク構想……山口昇士（箱根町長、箱根ジオパーク推進連絡会）  
 PS-17 糸魚川ジオパークの取組み……山縣耕太郎（上越教育大）  
 PS-18 糸魚川ジオパークにおける地域住民の参加……馬場龍一・山本隆太（早稲田大）  
 PS-19 佐渡ジオパーク推進の取組みについて……須藤洋行（佐渡市教育委員会・佐渡ジオパーク推進準備室）  
 PS-20 伊那谷自然友の会・南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークの紹介……松島信幸・寺平 宏（伊那谷自然友の会）・村松 武（飯田市美術博物館）・河本和朗（大鹿村中央構造線博物館）  
 PS-21 伊豆半島ジオパーク構想……植田基靖（伊東市役所）  
 PS-22 恐竜溪谷ふくい勝山ジオパークにおける教育普及活動……木下裕基（勝山市）・矢部

- 淳（福井県立恐竜博物館）
- PS-23 山陰海岸ジオパークでの玄武洞の位置づけ……松原典孝・先山 徹（兵庫県立大）・三田村宗樹（大阪市立大）
- PS-24 山陰海岸ジオパークでの生涯学習と研究者の役割ージオ環境研究部門の設立ー……先山徹・松原典孝・藤本真里・田原直樹（兵庫県立大）
- PS-25 隠岐ジオパークの取り組みについて……野辺一寛（隠岐ジオパーク推進協議会）
- PS-26 室戸ジオパークの取り組み……柴田伊廣（室戸ジオパーク推進協議会事務局）
- PS-27 島原半島ジオパークの取り組みージオパークを用いた地球科学の普及ー……大野希一（雲仙岳災害記念館）
- PS-28 阿蘇ジオパークの活動……渡辺一徳・横山勝三（阿蘇ジオパーク推進協議会）
- PS-29 「天草御所浦ジオパーク」現況と「天草ジオパーク」への取り組み……長谷義隆（御所浦白亜紀資料館）
- PS-30 霧島ジオパークへの取り組み……井村隆介（鹿児島大）・霧島ジオパーク推進連絡協議会
- PS-31 日本の美しい風景を守るナショナル・トラスト……中安直子（日本ナショナル・トラスト協会）
- PS-32 市民参加型の自然モニタリングについて……志村智子（日本自然保護協会）
- PS-33 地球電磁気・地球惑星圏学会の教育・アウトリーチ活動地球電磁気・地球惑星圏学会アウトリーチ部会……畠山唯達（岡山理科大）
- PS-34 地質学会の普及広報活動ーフォトコンテストー……坂口有人（海洋研究開発機構）・内藤一樹（産総研）
- PS-35 地質学会の普及広報活動ーホームページ、広報誌ー……坂口有人（海洋研究開発機構）・内藤一樹（産総研）
- PS-36 地質学会の教育・アウトリーチ活動ーたんけんマップ、小・中・高校生発表会などー……藤林紀枝（新潟大）・矢島道子（地質情報整備・活用機構）・三次徳二（大分大学）・中井 均（都留文科大）
- PS-37 日本海洋学会教育問題研究会の海洋に関する教育と知識普及活動……市川 洋（海洋研究開発機構）・岸 道郎（北海道大）
- PS-38 日本古生物学会における化石グッズの制作……中島 礼（日本古生物学会、産総研）
- PS-39 全国の教室に露頭を届ける「地層宅配便計画」……植木岳雪（産総研）・地学教育学会広報委員会
- PS-40 国際惑星地球年（IYPE）2007-2009 を終えて……宮崎光旗（産総研）
- PS-41 「森林の日」ー森林（もり）のめぐみー……荒木 誠（森林総合研究所）
- PS-42 5月10日は地質の日……斎藤 眞（地質の日事業推進委員会事務局、産総研）
- PS-43 「土木の日」のアウトリーチ活動……宮川幸雄（土木研究所）
- PS-44 緑提灯活動について……櫻本直美（生活者のための食の安心協議会）
- PS-45 12年続けてきた子どもジオツアー「地震火山こどもサマースクール」……中川和之（時事通信社）
- PS-46 国際地学オリンピック……田中義洋（東京学芸大学附属高）
- PS-47 国際地理オリンピック……秋本弘章（獨協大）
- PS-48 サイエンスアゴラ……渡辺政隆（科学技術振興機構）
- PS-49 キッチン火山実験紹介……栗山将幸（秋田大）
- PS-50 化石チョコレートー新しい化石のアウトリーチ……森尻理恵・利光誠一・斎藤 眞・古谷美智明・青木正博（産総研）
- PS-51 簡易液状化実験装置「エキジョッカー」……宮地良典・兼子尚知・澤田結基・森尻理恵（産総研）
- PS-52 Dr. ナダレンジャーの自然災害の科学実験……納口恭明（防災科技研）
- PS-53 防災教育に活用できるコンテンツの作成・提供の推進……井口 隆（防災科技研）
- PS-54 球面ディスプレイによるプレート運動他のデモンストレーション……小田啓邦（産総研）・畠山唯達（岡山理科大）・齊藤昭則（京都大）
- PS-55 地球立体展示ダジック・アースを用いた地球科学に関する展示と授業……齊藤昭則（京都大）
- PS-56 MAGE Project: 地磁気の可視化と教育啓蒙活動……畠山唯達（岡山理科大）
- PS-57 野外活動における安全管理についてー万が一のための一次救命処置体制の確立と「説明と同意」の必要性……岩船昌起（志学館大）

- PS-58 科学リテラシー向上のための web 配信 (サイエンス チャンネル等) ……西 亮 (科学技術振興機構)
- PS-59 「サイエンスカフェ」ー地球惑星科学を語り合うー ……千葉 崇 (東京大)・山田健太郎 (東京工業大)
- PS-60 サイエンスシートとその可能性 ……小島健一 (任意団体「社会科見学に行こう」)
- PS-61 地学教育フォーラムの活動紹介 ……宮嶋 敏 (埼玉県立深谷第一高)
- PS-62 大地の魅力をみんなのものに! :北海道地質百選 ……重野聖之 (北海道地質百選検討グループ)
- PS-63 研究者と島をつなぐもの (利尻島調査研究事業の歴史と現状) ……佐藤雅彦 (利尻町立博物館)
- PS-64 利尻島におけるオオハンゴンソウ防除の取組み ……小杉和樹 (利尻島自然情報センター)
- PS-65 「さいはての島」利尻島における研究成果の地域への還元と地学関連普及事業 ……近藤玲介 (産総研)・佐藤雅彦 (利尻町立博物館)
- PS-66 北海道北十勝で行った自然ガイド・市民向けジオツアー ……澤田結基 (産業技術総合研究所)・武田一夫 (帯広畜産大)・川辺百樹 (北海道自然史研究会)・藤山広武 (十勝の自然史研究会)
- PS-67 地質研究所のアウトリーチ活動 ……鈴木隆広 (北海道立総合研究機構・地質研究所)
- PS-68 世界最古の大型カイギュウ・サッポロカイギュウ発掘調査 ……英 弘 (明治コンサルタント (株))
- PS-69 雪形観察のすすめ ……山田高嗣 (国際雪形研究会、札幌第一高)
- PS-70 噴火湾北岸縄文エコミュージアムの活動とサテライト形成 ……小杉 康 (北海道大)・鈴木正章 (道都大)
- PS-71 宮沢賢治ジオツアー ……矢島道子 (地質情報整備・活用機構)
- PS-72 ジュニア学芸員の育成 10 年ー自然科学に関心をもつ中学・高校生向け事業の展開 ……小池 渉 (ミュージアムパーク茨城県自然博物館)
- PS-73 環境かるたの製作と普及活動 ……茨城県立竹園高校保健委員会環境班 (スーパーサイエンス部)
- PS-74 茨城県霞ヶ浦環境科学センターにおける普及活動 ……宮本直樹 (茨城県霞ヶ浦環境科学センター)
- PS-75 地質標本館の小学校団体対応で行う水路実験 ……澤田結基・玉生志郎・徳橋秀一・長森英明・森尻理恵・宮地良典・利光誠一・酒井 彰・青木正博 (産総研)
- PS-76 産総研・地質調査総合センターにおけるアウトリーチ活動ー一般公開・地質情報展・オープンラボー ……水野清秀 (産総研)
- PS-77 森林総合研究所のアウトリーチ活動 ……荒木 誠 (森林総研)
- PS-78 「ジオネットワークつくば」ーつくば市地域におけるアウトリーチ活動のネットワークー ……佐藤由美子・古川竜太・渡部芳夫 (産総研)
- PS-79 つくば地形教室でのセミナー・実験観察会・ジオツアー ……池田 宏 (深田地質研)
- PS-80 古くて新しいまちに 古くて新しいメディアを! (住民の情報と交流のHUBを目指して) ……増田和順 (つくばコミュニティ放送株式会社 (ラヂオつくば))
- PS-81 地域発・防災ラジオドラマの取組み ……長坂俊成・坪川博彰 (防災科技研)
- PS-82 市民レポーターによる災害リスクコミュニケーションの取組み ……長坂俊成・李 泰榮・岡田真也 (防災科技研)
- PS-83 トトロの森の環境教育 ……対馬良一 (財団法人「トトロのふるさと財団」)
- PS-84 早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター (WAVOC) 公認所沢キャンパス湿地保全活動 ……中松美波 (早稲田大)
- PS-85 埼玉県立自然の博物館における展示・イベントによる自然史教育と研究の普及 ……楡井尊 (埼玉県立自然の博物館)
- PS-86 地域の自然と歴史を学ぶ講座 ……高原勇夫 (さいたま市土合公民館)
- PS-87 440 回を越える『日曜地学ハイキング』の取組み ……正田浩司 (地学団体研究会埼玉支部・日曜地学の会)
- PS-88 市民グループとの連携による「武蔵野の自然史」 ……正田浩司 (埼玉県立所沢高)
- PS-89 縄文体験学習ー市立市川考古博物館の教育普及活動ー ……領塚正浩 (市川考古博物館)
- PS-90 博物館から地域の自然をみてみよう ……岡崎浩子・江口誠一 (千葉県立中央博物館)
- PS-91 関さんの森エコミュージアムー都市に残る里山を未来のこどもたちにー ……山田純稔

- (関さんの森エコミュージアム)
- PS-92 「人と自然との関わり大切さ」を教える人材の育成～千葉大学園芸学部「フィールドコラボレーション」の取り組み……百原 新 (千葉大)
- PS-93 大学オープンキャンパスを利用した地域自然史の紹介活動……須貝俊彦・自然環境変動学研究室メンバー (東京大)
- PS-94 人形劇による地震防災(耐震構造の啓蒙)……幸田眞希 (聖徳大学短大)
- PS-95 すべりたくない雑草小嚙……佐々木知幸・清右衛門 (市原市在住)
- PS-96 写真と図で見る日本の地質……矢島道子 (地質情報整備・活用機構)
- PS-97 地球生命史教育の拠点をめざす地域科学館……川辺文久 (文科省)・三村麻子・工藤悠 (杉並区立科学館)
- PS-98 多摩六都科学館での地学教育への取り組み……小田島庸浩 (多摩六都科学館)
- PS-99 地形・地質を題材とした一般向け講座……鈴木毅彦 (首都大)
- PS-100 「郷土の自然と歴史」を普及する……角田清美 (東京都立北多摩高)・鈴木高志 (日本大)
- PS-101 国分寺崖線と考古遺跡ー野川流域の旧石器時代遺跡を中心とした普及・公開の取り組みー……野口 淳 (明治大学校地内遺跡調査団)・三鷹市教育委員会・調布市教育委員会
- PS-102 郷土かるたに隠された地学メッセージを紐解く……鴻田臣代 (NPO 法人武蔵村山みんなのひろば)
- PS-103 多摩川流域市民学会の試みと流域の自然史研究の展望……長谷川博之 (多摩川流域市民学会、東京都立日野高)
- PS-104 日本火山の会における情報交換・啓発活動・野外観察会等の取り組み……大石雅之 (日本火山の会、首都大)
- PS-105 応用地質グループのCSR活動ー持続可能な社会の構築を目指して社会に貢献するー……川地真人 (応用地質㈱)
- PS-106 地質コンサルタント企業の自然史教育への関わりについてーCSR活動としての取り組みの一例ー……小林 淳 (㈱ダイヤコンサルタント)
- PS-107 損保ジャパンの防災CSR活動について……児島 正 (損保ジャパン)
- PS-108 工学院大学における防災・減災に関する取り組みについて……濱野航平 (工学院大)
- PS-109 国立極地研究所におけるアウトリーチ活動……三浦英樹 (国立極地研究所)・国立極地研究所広報室
- PS-110 街でファーストジオロジーを拾い集める……川村喜一郎・藤田勝代 (深田地質研究所)
- PS-111 ファースト・ジオロジーのすすめー(財)深田地質研究所で実施してきた地学教育の普及活動……藤田勝代 (深田地質研究所)・加藤弘徳 (荒谷建設コンサルタント)・横山俊治 (高知大)・川村喜一郎 (深田地質研究所)
- PS-112 GIS Day in 東京 2005～2010:産学公連携6年間の歩み……松山 洋 (首都大)
- PS-113 早稲田大学教育学部地球科学専修の入試の取り組み……高木秀雄 (早稲田大)
- PS-114 大学で楽しむ参加型地球科学……金丸龍夫 (日本大)
- PS-115 「東京サイエンスネットワークの構築」国立天文台による地域ネットワークの取り組み……内藤誠一郎 (国立天文台)
- PS-116 センス・オブ・ワンダーを醸す、むさしの化石塾……福嶋 徹 (GeoWonder 企画 むさしの化石塾)
- PS-117 ICS-GEO 活動目的と現状……遠藤海斗 (駒澤大)・松田倫明 (首都大)・鈴木孝志 (日本大)・岡澤佑介 (明治大)・若山大樹 (早稲田大)・仲尾 剛 (東京学芸大)
- PS-118 統合国際深海掘削計画 (IODP) のアウトリーチ活動について……小俣珠乃 (海洋研究開発機構・地球深部探査センター)
- PS-119 自然史博物館における子どものための地学展示を考える……大島光春・田口公則・石浜佐栄子・広谷浩子 (神奈川県立生命の星・地球博物館)
- PS-120 工事現場に露出した地層の自然史学習への活用～境川遊水地の例～……田口公則・本田昌幸 (神奈川県立生命の星・地球博物館)・神奈川県藤沢土木事務所河川砂防第二課
- PS-121 相模原市立博物館の普及活動ーボランティアと共にー……河尻清和 (相模原市立博物館)
- PS-122 『相模原市史 自然編』の紹介……久保純子 (早稲田大)・相模原市史編さん室
- PS-123 (CSR活動) テクノフォーラムを通じた次世代を担う子どもたちへの育成・支援活動 『地図の仕事ーアジア航測会社見学ー』……千葉達朗・鈴木康夫 (アジア航測株式会社)
- PS-124 新潟大学のコア・サイエンス・ティーチャー (CST) 養成プログラムにおける地学分野の指導力向上へ向けた取り組み……平中宏典・藤林紀枝・高清水康博・興治文子 (新潟

- 大・教育)
- PS-125 立山カルデラ砂防博物館での自然史教育への取り組み……福井幸太郎（立山カルデラ砂防博物館）
- PS-126 自主防災組織・町内会などに対する防災情報の発信……青木賢人（金沢大）
- PS-127 信州大学山岳科学総合研究所の活動……山本信雄（信州大）
- PS-128 自然史研究と教育の場としての上高地—上高地自然史研究会の取り組み—……若松伸彦（東京農大）
- PS-129 人形劇稲むらの火のプロジェクトとその広がりについて……児島 正（NPO 法人人形劇プロジェクト事務局）
- PS-130 児童を対象とした防災の人形劇と紙芝居……丹羽ちえこ（人形劇団わにこ）
- PS-131 地学を学んでいない高校生に地学の面白さを伝える試み—「愛知教育大学高校生サイエンス・サマー・キャンプ」の紹介……星 博幸（愛知教育大）
- PS-132 地域の小・中学生に地学野外観察の機会を提供し、同時に大学生の教育力アップを目指す試み—「ひらめき☆ときめきサイエンス」の紹介……星 博幸（愛知教育大）
- PS-133 親子対象フィールドセミナー「地球教室」……東田和弘・桂田祐介（名古屋大）・西本昌司・松田正道（名古屋科学館）・古川邦之（愛知大）・吉田英一（名古屋大）
- PS-134 ゴウ類の足跡化石発掘と東海層群の古環境を調べて……森 勇一（金城学院大）・田中里志（京都教育大）・津村善博・小竹一之（三重県立博物館）
- PS-135 地域の人々が展示をする～湖国もぐらの会と琵琶湖博物館の例～……里口保文（琵琶湖博物館）・飯村 強（湖国もぐらの会）
- PS-136 市民と博物館で身近な自然環境調査：大阪市立自然史博物館と友の会の活動……中条武司（大阪市立自然史博物館）
- PS-137 利用者の思考の流れに注目した普及活動の実践例……碓 京子（林原自然科学博物館）
- PS-138 小中学校における木材を用いた環境史・地域文化・美術表現に関わる教科横断的な学習課程……米延仁志・尾崎志郎・内藤 隆（鳴門教育大・学校教育）
- PS-139 ジオ鉄を楽しむ—鉄道車窓からのジオツアーの提案（1.JR 四国・土讃線）——……加藤弘徳（荒谷建設コンサルタント）・藤田勝代（深田地質研究所）・横山俊治（高知大）
- PS-140 財田町の自然を調査し環境保全の意識を高める……近井重美（財田町自然観察同好会）
- PS-141 市民が調べる地元の地質：香川県の子持ヶ石（こもけいし）……石井利邦（三豊市在住）
- PS-142 石の楽器の演奏会……前田宗一（株）興仁）
- PS-143 朝倉サイエンスギャラリー—高知大学自然史展示室の開設と活用の試み……岩井雅夫・近藤康生・吉倉紳一・川村和夫（高知大・理）
- PS-144 高知コアセンターのアウトリーチ活動～地球科学のおもしろさを伝えるために～……池原 実（高知大）
- PS-145 ジオ鉄を楽しむ—鉄道車窓からのジオツアーの提案（2.ごめん・なはり線）……藤田勝代（深田地質研究所）・加藤弘徳（荒谷建設コンサルタント）・横山俊治（高知大）
- PS-146 大学遠隔地施設の取り組み：別府夏休み地獄ハイキング……竹村恵二（京都大）
- PS-147 南西諸島における生物多様性優先保全地域マップづくり……安村茂樹（WWF ジャパン）

## ◆猿橋賞 募集

女性科学者に明るい未来をの会は、第31回猿橋賞の推薦の募集を開始いたしました。募集要項をホームページ <http://www.saruhashi.net/> に掲載致しましたので、推薦書類はそこからダウンロードして下さい。今後、募集要項に変更がある場合は、ホームページに掲載いたしますので、応募の際はホームページをご確認下さい。

- ・対 象：推薦締切日に50才未満で、自然科学の分野で、優れた研究業績を収めている女性科学者
- ・表彰内容：賞状、副賞として賞金30万円、1件（1名）
- ・締 切：2010年11月30日

なお、この件についての問い合わせは、下記に電子メールでお願いいたします。  
saruhashi2010(at)saruhashi.net

## ◆ 2010年日本第四紀学会 学会賞・学術賞、論文賞・奨励賞受賞者決定

日本第四紀学会では、学会賞、学術賞、功労賞、論文賞、奨励賞を設け、顕彰を行っております。2010年の学会賞、学術賞、論文賞、奨励賞の選考を行い、受賞者が決定されました。

学会賞は第四紀学の発展に貢献した顕著な業績を有し、また日本第四紀学会の活動に著しい貢献があった正会員に授与される、学会における最高の賞です。また学術賞は第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与されます。会員の皆様から推薦募集・立候補を行い、3月31日をもって締め切り、学術賞に1名、学会賞に4名の候補者が推薦されました。両賞の候補者は、日本第四紀学会学会賞受賞者選考委員会（委員長：公文富士夫会員、委員：小池裕子、中村俊夫、兵頭政幸、山崎晴雄各会員）によって最終候補者が推薦され、6月19日に行われた評議員会において下記のとおり、受賞者が決定されました。

日本第四紀学会学会賞：岡田篤正会員

受賞件名：「変位地形を用いた活断層の活動史および活断層危険度評価に関する一連の研究」

日本第四紀学会学会賞：吉川周作会員

受賞件名：「火山灰層序および完新世環境地質に関する一連の研究」

日本第四紀学会学会賞：多田隆治会員

受賞件名：「日本海堆積物を用いた第四紀東アジアモンスーンに関する一連の研究」

日本第四紀学会学術賞：鈴木毅彦会員

受賞件名：「テフラ対比に基づく中部～東北地方の火山噴火史および古地理復元に関する一連の研究」

論文賞及び奨励賞は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を公表した会員である著者に授与されるもので、とくに奨励賞は若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的としています。両賞の最終候補者は、日本第四紀学会論文賞受賞者選考委員会（委員長：岡崎浩子会員、委員：北村晃寿、鈴木毅彦、高橋啓一、三田村宗樹各会員）によって推薦され、6月19日に行われた評議員会において下記のとおり、受賞者が決定されました。

日本第四紀学会論文賞：青木かおり会員、入野智久会員、大場忠道会員

対象論文：論説 青木かおり・入野智久・大場忠道（2009）「鹿島沖海底コア MD01-2421の後期更新世テフラ層序」48巻、6号、391－407頁

日本第四紀学会奨励賞：谷川晃一朗会員

対象論文：論説 谷川晃一朗（2009）「兵庫県円山川下流域における沖積層の層序・堆積環境と完新世の相対的海水準変動」48巻、4号、255－270頁

日本第四紀学会奨励賞：丹羽雄一会員

対象論文：論説 丹羽雄一・須貝俊彦・大上隆史・田力正好・安江健一・齋藤龍郎・藤原治（2009）「濃尾平野西部の上部完新統に残された養老断層系の活動による沈降イベント」48巻、5号、339－349頁

各賞受賞者の表彰式は、8月21日の日本第四紀学会大会総会後に行われます。受賞理由等の詳細は、総会において報告されると共に次号の第四紀通信にてお伝えします。また学会賞・学術賞受賞者による講演会を大会2日目（8月21日）と2011年1月下旬との2回に分けて開催する予定です。

## ◆名誉会員の推薦について (2010.6.19 評議員会)

名誉会員候補者選考委員会 陶野郁雄 (委員長)・大場忠道・齋藤文紀

日本第四紀学会会則および名誉会員候補者選考規定に基づき、名誉会員候補者を選考すべく協議致しました。その結果、本会の会長・長年の評議員・日本学術会議第四紀研究連絡委員会委員長、INQUA (国際第四紀学連合) の役員などを努められ、あるいは日本第四紀学会賞を受賞されるなど、第四紀学の発展に多大のご尽力をいただき、また長年の研究上、研究組織上の功績が誠に顕著な下記の3名の会員を本会の名誉会員候補者として推薦いたします。

記

名誉会員候補者と主な理由

熊井久雄 (地質) 1939 生 13 期 (1975-1999) にわたる評議員、及び会長 (2001-2004)  
 町田 洋 (地理) 1933 生 16 期 (1956-2005) にわたる評議員、及び会長 (2005-2008)  
 松島義章 (地質) 1936 生 11 期 (1956-2009) にわたる評議員、及び学会賞受賞 (2008)

## ◆2009年学会賞・学術賞受賞者講演会 (第2回) 報告

東京大学大学院新領域創成科学研究科 修士課程 成瀬浩輔

6月19日(土)、早稲田大学早稲田キャンパス22号館にて、日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞者講演会(第2回)が行われた。当日は、92名(うち会員49名、非会員43名)の方が来場された。講演者は、学術賞受賞者の小疇 尚先生(明治大名誉教授)と、学会賞受賞者の小野 昭先生(日本第四紀学会副会長、明治大教授)のお二方で、それぞれ「山岳地域・極地における氷河・周氷河地形に関する研究」と、「旧石器時代の人類活動と自然環境」というタイトルで講演をされた。

小疇先生の講演は、現在から学部時代にまでさかのぼったご自身の研究経歴とその内容についてのお話であった。小疇先生は学部時代から大雪山や北アルプスなどの寒冷地域でフィールドワークを行い、氷河、周氷河地形に関する様々な研究をすすめられた。その範

囲は国内山岳地域にとどまらず、アンデス、ヒマラヤ、アルプス、ノルウェースバルバル諸島など、非常に広い。

特に構造土の研究に関しては、当時は霜柱との関連を考察したものが一切なかったことに着目し、自らが先頭となって多くの若手とともに研究を進めた。

私も現在、修士課程で氷河地形をテーマにした研究を行っているが、実際に小疇先生の論文等から学ばせていただく機会は多く、その功績の大きさを実感している。そんな先生が、国内でもまだまだ多くの地域に未調査の部分があるとおっしゃっていたのを聞き、自然科学の奥深さ、壮大さを改めて感じた。今回このような形で小疇先生の講演を生で聴くことができ、大変勉強になった。今後もいっそうのご活躍を願っています。

東京大学大学院人文社会系研究科 修士課程 高屋敷飛鳥

学術賞受賞者の小疇 尚先生の講演に引き続いて、学会賞を受賞された小野 昭先生の講演が行われた。

小野先生は、講演の前半でご自身の今までの研究を振り返り、後半で特に長年力を注がれてきた人類活動と自然環境に関する研究について話され、最後に今後の展望を述べられた。

小野先生は、初め石器の型式・形態学の研究をされ、その後それに黒曜石やサヌカイトの産地推定を合わせて考えることで人類活動を動的に復元することを試みられた。人類活動とそれに関わる自然環境との関係に関心を持たれるようになったのは打製骨器の研究を始められてからである。打製骨器は日本での資料数が少なく、世界中でも当時ほとんど手付かずであったため、先生は日本だけでなく世界各地で調査を行われ、約20年かけてそれらの資料を体系的にまとめられた。

打製骨器などの道具の体系(人類活動)と、環境変動(自然環境)は切っても切り離せないものであったが、その相互関係を具体的に捉えるためにはいくつかの問題があった。後半はそのことについて大きく二点指摘され、最後にそれらを比較する方法論(比較考古学)についての課題を述べられた。

先生は講演の中で打製骨器の資料をみることに5年かかったという体験談をされ、あきらめずに取り組むことが大切だと仰り、現在学生で旧石器時代を専門としている私は大いに励まされた。それと同時に未開拓の分野を進んでいく勇気も与えてくださった。更に、現在も研究に精力的に取り組まれ、学会では第一人者として活躍される姿は、研究者の理想像であると思う。尊敬の念に絶えないと共に、これからも多くのことを学ばせて頂くことと思う。

## ◆ 2010年学会賞・学術賞受賞者講演会（第1回）のお知らせ

2010年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞者の方の受賞記念講演会を下記の日程で開催の予定です。第1回は8月の大会・総会開催時に2名の方の講演を予定しております。また、第2回（岡田篤正会員・吉川周作会員）は2011年1月下旬に開催の予定です。

[日時]：2010年8月21日（土）16:00～17:25（2010年度総会開催日）

[場所]：東京学芸大学芸術館ホール（大会・総会場；詳しくは本号の大会第4報をご覧ください）

[講演]：

16:00～16:40 学会賞受賞者：多田隆治（東京大学）

「日本海堆積物を用いた第四紀東アジアモンスーンに関する研究」

16:45～17:25 学術賞受賞者：鈴木毅彦（首都大学東京）

「テフラ対比に基づく中部～東北地方の火山噴火史および古地理復元に関する研究」

## ◆ 日本第四紀学会シンポジウム「学校教育で地学は生き残れるか？：学会と教育現場との連携に向けて」の開催報告

植木岳雪（産総研・地質情報研究部門）

6月19日（土）の13～18時30分に、早稲田大学22号館202教室において表記のシンポジウムが開催されました。日本第四紀学会では教育をテーマとしたシンポジウムを開催するのは初めてのことです。今回のシンポジウムは、さまざまなテーマの講演を行い、学会間の連携を深め、日本第四紀学会以外の方にも多く参加してもらうために、日本地学教育学会、日本理科教育学会、日本科学教育学会と共催し、日本地質学会、日本地球惑星科学連合、早稲田大学教育・総合科学学術院の後援を受けました。参加費は無料で、事前登録はなしとしました。当日は、全部で114名の参加があり、そのうち日本第四紀学会の会員は48名、非会員は66名でした。

このシンポジウムは、平成24年度から始まる高等学校の理科の新教育課程に向けて開催しました。新教育課程では理科が3科目必修になり、ここで地学の履修者が増えなければ、地学という科目自体がなくなるとも言われています。いわば、地学が生き残るための最後のチャンスで、存亡をかけた戦いです。そのためには、研究系学会、教育系学会および現場の教員との連携を深め、お互いに協力する関係を築くことが重要です。従来は、それぞれが独立に地学教育の問題の解決に向けて取り組んでおり、その中で閉じてしまっていたように見えます。日本第四紀学会は、高等学校の理科4教科および地歴に対応するさまざまな分野の研究者とともに、小中高の多くの教員からも構成されていますので、研究

系学会、教育系学会および現場の教員との接着剤の役割を果たすことが期待されます。

今回のシンポジウムでは、地学教育の歴史、地学教育の現状と課題、理科教育・科学教育からみた地学教育、各教育段階における地学教育の事例を、15～20分で網羅的に講演していただきました。各テーマはそれだけでシンポジウムが企画できるほどのもので、時間不足は否めませんでした。地学教育が抱える問題点や解決策などを多様な視点・立場から紹介してほしかったからです。総合討論では活発な質疑が行われ、時間は予定よりも30分延長されました。それでも、参加者からは議論の時間が不足していると意見が多く出されました。今後、各学会や教員の研究会などで、1つのテーマをより深く掘り下げたシンポジウムやワークショップが開催されることを希望します。シンポジウムの後に懇親会が行われたのですが、講師の方はなんと全員出席で、さらに密度の濃い議論が行われました。学会間の連携および学会と現場の教員の連携の強化を積極的に進めることを皆で再確認し、同時に日本第四紀学会に対する大きな期待も感じました。

以下に、神奈川県の実職教員の小尾さん、早稲田大学大学院生の西口さんによる、それぞれの立場からのシンポジウムの感想を掲載いたします。お二人には、ここで厚くお礼申し上げます。なお、参加者に提出いただいたアンケートについては、別の機会にまとめて公表したいと思います。

## ◆日本第四紀学会シンポジウム「学校教育で地学は生き残れるか？：学会と教育現場との連携に向けて」の参加報告

学校教育で地学は生き残れるのか？今回のシンポジウムに出席し、それは地学に携わる私たち次第である、ということを確認しました。そして、これからどうして行けば良いのか、方向性を考えるととても良い機会となりました。

多くの高校では平成22年度に入り、平成25年度（理科は24年度）から始まる新学習指導要領に向けて、教育課程の検討を始めました。本校でも平成22年度後期から検討を始める予定です。平成24年度の教育課程は多くの高校で平成23年の9月までに、平成25年以降の教育課程は平成24年の9月までに確定するはずですが、教育課程が移行する、これからの1年2年が私たちの踏ん張り時となります。このタイミングに今回のシンポジウムが行なわれたことは、非常に大きな意義があったかと思えます。

「埼玉県高等学校理化研究会 地学研究委員会」では、地学専門以外の理科教員が地学を担当する時に困らないように、地学「定番」実習のノウハウを分かりやすく記した「埼玉から地学 地球惑星科学実習帳」を平成22年4月に発行し、埼玉県高校全理科教員に配布した、という報告がありました。埼玉県では、次の教育課程でも多くの高校で地学が開講するのではないかと思います。埼玉県のこの取り組みを受け、出席者たちは自分の地域でまたは全国規模でどのように取り組んで行こうか、考えさせられたのだと思います。

早稲田塾の倉部さんからは、大学（文系学部を含め）のAO入試を受ける際、地学を選択していると有利に働く、という説明があり

小尾 靖（神奈川県立相模原青陵高等学校）

ました。AO入試では、どのような人物なのか、大学入学後に何をしたいのかが問われます。「社会科学の面で環境に取り組みたい」という高校生が目立つようです。工学分野においてもそのような高校生は多いかと思えます。環境を語る場合、それなりの裏づけ（『地学』の知識）が必要になります。平成21年度、一般受験（筆記試験）を利用して大学進学をした学生は55%ぐらいだそうです。残りの45%ぐらいがAO入試や推薦入試で大学進学をしていることになります。大学受験で『地学』を必要としている高校生は多いことが考えられるそうです。

高校入試では、他の理科分野に比べて地学分野の出来が悪いと感じます。小中学校の教員に、地学の指導を十分に出来る者が少ないからではないでしょうか。その結果、地学が選択できる高校でも、地学分野を学ばずに理科選択をさせると、地学選択者が少なくなる傾向があるのだと思います。多くの小中学校で地学教育が不十分であり、多くの高校で地学の授業がないために、理科離れが進んでいる部分もあるのだと感じています。

日本地球惑星科学連合が発足し、今回のシンポジウムがあり、地学関係者たちがよりまとまって地学の必要性を訴える機運が高まっているかと思えます。また、地学に限らず学際的な日本第四紀学会主催で行なったことは大きく、これからは地学関係者以外も含めての動きに発展させていく必要があります。そして、私たちは小中高校に対し地学教育のサポートを行なう体制作りに努める必要があります。

西口達也（早稲田大学大学院創造理工学研究科・地球・環境資源理工学専攻修士2年）

早稲田大学22号館において2010年6月19日午後に行われた標記シンポジウムは、約110名の参加者が集まり、第一部・第二部・第三部と三つに別れ、それぞれ講演が行われた。第一部「地学教育の歴史と未来」では、これまでの地学教育の歴史や、地学・ひいては理科教育に関わる政策や雇用についての講演が行われた。この部では、現在の地学教育がいかに危機に瀕しているのかということが伝わり、非常に重大な内容であった。第二部「地学教育の現状と課題」では、地学をどのようにすれば上手に教えられるか・伝えることができるかといった方法論の講演が行われた。また、科学教育そのものや教育現場の間

題といった、現状の地学教育が抱える問題点についても講演が行われた。この部では、数多くの実践的な教育の例やアンケートを用いる講演が中心で、地学教育の現状をどうすれば良くできるかということを示すものであり、大変興味深かった。第三部「学会と教育現場との連携に向けてできること、すべきことは何か？」では、地学教育学会・科学教育学会などのこれからの指針や、それぞれの学会が行った教育活動の取り組みを示し、改善策を提示した。

今回のシンポジウムにおいて話された、地学教育の問題にまつわるエピソードは、私の高校時代における出来事を思い起こさせるも

のであった。私の高校では、地学を教えることができる先生は一人しかおらず、さらに地理の科目との兼任状態であった。加えて、高校一年のときに、来年度の理科学科目選択の説明会が行われた中で、(文系志望はともかく)私が理系志望だったこともあり、地学担当の先生が大学受験科目の選択が不利になるということから、自ら地学を薦めないという状況であった。公立高校であったことも要因の一

つであるが、私の高校のように、地学を選択するという選択肢すら与えられないという現状にある高校が大多数であると考えられる。新カリキュラムでは、理科の科目選択が四科目のうちから三科目を選ぶことになったが、上記のような現状がつい最近まで蔓延していたことを考えると、地学教育の振興にはよりいっそうの努力が求められるだろう。

## ◆ International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity: “Active Tephra in Kyushu, 2010” , Kirishima City, Kyushu, Japan 開催報告

青木かおり (立正大学・INTAV-J Organizing Committee)

2010年5月9～17日に鹿児島県霧島市で開催した国際野外会議について報告する。本会議はINQUA(国際第四紀学連合)のCommissionの一つであるCommission on Stratigraphy and Chronology(SACCOM; President, Prof. Brad Pillan)中の小委員会であるInternational focus group on tephrochronology and volcanism(INTAV; President, Dr. Siwan Davies)の活動の一つで、4年ごとに開催されるINQUA本大会とは2年程度ずらして開かれるMid-Congressという位置づけの集会である。野外巡検が大きな目玉となる会議であることから、これまでにアイスランド、アメリカ、ニュージーランド、フランス、カナダといった火山近傍もしくは多くの広域テフラが観察される場所で開催されてきた。2005年のDawson City(Yukon, Canada)では参加した日本人研究者の多くが「次は日本でやるよね?」と声をかけられたこともあり、2007年のINQUAケアンズ大会で日本第四紀学会のテフラ・火山研究委員会(鈴木毅彦委員長; ~2007年)が、次のMid-Congressを日本で開催する旨を宣言した。

2008年に、会議を主催するテフラ・火山研究委員会(長岡信治委員長; 2008年~現在)によって、大会実行委員会としてINTAV-J Organizing Committeeが組織され、福岡孝昭委員長(立正大)の陣頭指揮のもと開催地や開催時期の選定が行われた。開催場所が南九州に決定された時点で、酷暑が予想される7~8月を避ける、欧米諸国のアカデミック・シーズン(9~3月)を避けるといったことを申し合わせた結果、5月の大型連休の後に開催するという日程が決まった。さらに、2日間のOne-Day Tripと2泊3日のPost-conference Excursionのために、巡検のコースの選択や案内書の作成について小林哲夫(鹿児島大)、宮縁育夫(熊本大)、奥野 充(福岡大)

の3氏に協力を願った。

また、今回は“とにかく物価が高い”日本で開催することから、海外の研究者の参加を促すために、若手研究者や学生への旅費の補助を行い、参加登録費をできるだけ安くすることを目標とした。そのために助成金の獲得が愁眉の課題となった。まず、会場の鹿児島県霧島市の市民ホール(シビックセンター)は使用料を無償としていただいたことで、参加登録費のコストをかなり抑えることが可能になった(一般参加者4万円、学生・若手研究者3万円)。さらに、東京地学協会(50万円)とPAGES(約27万円)からの助成金を受け、株式会社西日本技術、株式会社朝日印刷、株式会社パレオラボからもそれぞれ御寄付をいただいた。Young Scientist Travel Assistanceには17名の応募があり、最終的に12名(1名キャンセル)に旅費を助成した。また、INTAVのSecretaryをつとめるDavid LoweがINQUAに提案したプロジェクトINTREPID(Enhancing tephrochronology as a global research tool through improved fingerprinting and correlation techniques and uncertainty modeling)が採択されたことにより、その活動の一環として今回の国際野外会議の開催費として助成金(約63万円)を受け、これも若手研究者への補助に使用された。また、INTREPIDと関連の深い研究テーマとしてDr. Simon Blockley、Dr. Siwan Davies(INTAV President)、Dr. Duane Froese、Dr. Nicholas Pearce、中川 毅教授の5氏に、さらに中川光弘教授には九州における大規模な火山噴火のメカニズムについて、合計6氏のKeynote speakerに40分間の話題提供を依頼した。

本会議へは11カ国から合計76名が参加し、49件の口頭発表と38件のポスター発表を受け付け、37名がPost-conference excursionに参加した。組織委員会が予測していた程度

には参加者数（および出身国）を集めることに成功したといえる。特に、各国の最前線で研究しているテフラ研究者が、自分の研究室のポスドクや博士課程の学生に対して助成金の応募と、会議での研究発表を積極的に促していたことから、本会議が国際的な研究発表の場として認知され、非常に重要視されていたことがうかがえた。組織委員会としてはそのような集会を開催できたことを大変誇らしく思う。

大会の全体的な進行は概ね予定通りに運営されたといえる。イレギュラーな問題としては、4月にアイスランドのEyjafjöll火山噴火の影響でヨーロッパ各国の空港が閉鎖される事態になった。すると参加者からアイスランドの火山噴火についての特別セッションを設ける提案があり、10日の昼に3名から話題提供をしてもらった。幸いなことに、会議が開催されていた間は大規模な空港の閉鎖は起きなかったことから、来日帰国時に空港で足止めされた参加者はいなかった模様である。また、日本で発生した問題としては、4月20日に宮崎県で報告された口蹄疫の感染拡大が続いていたことから、残念ながら霧島市から宮崎県へ入る道路の通行を避け、巡検コースについては変更することを決断せざるを得なかった。

今回の会議では今後のINTAVの活動方針としてExecutive membersのSiwan DaviesとDavid Loweから、来年のINQUAベルン大会でのテフロクロロジーのセッションの提案を行う旨の報告があった。日本からもぜひ多くの研究者が参加してもらいたい。また、今年起きたアイスランドの火山噴火に関して第四紀のテフラ研究者の積極的な貢献が求められるとして、Daviesの主導で研究グループを作ることを考えているようである。さらに本会議で紹介された研究はQuaternary Internationalの特集号として出版することが決定され、6月に電子投稿の準備が整ったとこ

ろである（詳細な情報はINTAV-JのHPから<http://www.ris.ac.jp/intav-jp/index.html>）。

今後のINTAVの活動としては、当面は来年のINQUAベルン大会にむけての準備が最大のイベントになるが、気がかりな問題点は、ベルン大会後に予定されるMid-Congressの開催地についてである。これまでに開催されていない場所としてアフリカ、イタリア、カムチャッカ半島、東南アジア、中南米地域あげられが想定されるが、いずれも現地の受け入れが可能かどうかについて、打診することになるであろう。最後に、日本で国際野外集会の開催にあたって、浮かび上がった問題について記しておきたい。まず、今回の国際集会を開くにあたり、2年前から事前の会場選びや巡検コースの選定のために、現地に足を運ぶ作業を行ってきた。しかしながら、参加登録費をできるだけ安くするために、上記の作業に伴う各実行委員の交通費などは事務局経費としては計上されていないことから、各人の手弁当での運営になっていた。国際集会の開催のための準備はおおむね複数年度にわたることから、本来ならば外部の助成金の獲得とは別に何らかの準備金を事前に用意しておくべきであると思われる。今後の日本の第四紀研究者の国際交流を促すために、日本第四紀学会には国際ワークショップなどを開催するための準備を助成する基金の設立を切にお願いしたいところである。

INTAV-J Organizing Committee  
Chairman; 福岡孝昭 (立正大学)、Vice-chairman; 森脇 広 (鹿児島大学)、Secretary; 鈴木毅彦 (首都大学東京)、Committee Members; 長岡信治 (長崎大学)、井村隆介 (鹿児島大学)、青木かおり (立正大学)、David Lowe (Waikato University, NZ; current Secretary of INTAV)、Senior Advisor; 町田 洋 (東京都立大学)

## ◆ International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity: “Active Tephra in Kyushu, 2010” , Kirishima City, Kyushu, Japan 参加報告

2010年5月9～17日 (Post-Conference Excursion (5月15～17日) は別途記事参照) の9日間、INQUA (国際第四紀学連合) の一組織であるInternational focus group on tephrochronology and volcanism (INTAV) の活動として、International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Vol-

canism and Human Activity: “Active Tephra in Kyushu, 2010” , Kirishima City, Kyushu, Japan が、鹿児島県霧島市で開催された。参加者は、11カ国76人、日本42、イギリス12、アメリカ5、カナダ4、ニュージーランド4、スウェーデン3、オーストラリア2、ドイツ1、ロシア1、インドネシア1、フィ

リピン1であり、Oral presentationは49件、Poster presentationは38件であった。5月12日と13日には、One-day Excursionとして、霧島火山および桜島火山への行程が計画されていた。しかし、隣県、宮崎県での口蹄疫の発生に伴い、畜産国からの参加者も多いとの配慮から、当初の行程は、桜島周辺を2日間に分けて巡るコースへと変更された。それに伴い、Field trip guideの一部が利用されなかったことは残念であった。なお、Field trip guideは、各地点の情報以外にも豊富なカラー写真を含む九州のテフラに関連した解説書となっている。

1日目(5月9日)は、“Active Tephra in Kyushu, 2010”開催に先立ち、地質の日(5月10日)関連イベントとして、一般向け講演が開催された。David Lowe教授(NZ, Waikato University)は、「過去とのつながり～ニュージーランドの古ポリネシア人移住の年代を火山灰と考古の痕跡から考える」との講演を、町田洋前会長は、「どこまでも続く「シラス」～シラスを噴出した巨大噴火の灰雲は北東アジアを包み込んだ」との講演を行った。一般の参加者は、約300名、地元テレビ、新聞社の取材もあり盛況であった。

2日目(5月10日)はOral presentationおよびPoster presentationがあった。Keynote Speakerは、Simon Blockey (Royal Holloway University of London)、Siwan Davies (UK, Swansea University)の両氏であり、順に、「テフロクロノロジーの年代モデル：他の編年情報と統合したテフラへのベジアン・アプローチの適用」と「氷床コアに記録された微量なテフラ層：フレームワークの開発、高精度な相関、および編年の構築における手がかり」と題した講演があった。Oral presentationでは、テフロクロノロジーを利用した古気候研究、古環境復元など、各国の大規模なプロジェクトによる研究が多く発表された。近年、このような大規模なプロジェクトの研究において、特にテフロクロノロジーの利用が盛んであることが垣間みられた。また、Special sessionとして、現在もヨーロッパの航空網に混乱をもたらしているアイスランドのエイヤフィヤトラヨークトル(Eyjafjallajökull)噴火のテフラに関連した最新情報が紹介された。Chris Hayward (UK, University of Edinburgh)、Siwan Davies、Thorvaldur Thordarson (University of Edinburgh)の3氏から順に、Eyjafjöll火山の4月噴火で観察されたマグマの化学組成変化、Eyjafjöll噴火のヨーロッパ本土への火山灰拡散モデル、アイスランドの活火山と今回のEyjafjöll火山の噴火について、それぞれ報告があった。

3日目(5月11日)も2日目と同様にOral presentationおよびPoster presentationがあった。Keynote Speakerは、Nicholas Pearce (UK, Aberystwyth University)、Duane Froese (Canada, University of Alberta)の両氏であり、順に、「LA-ICP-MSによる微量元素の微量分析：10 μm以下火山ガラスの単一粒子における包括的な化学的特徴の探索」と「テフロクロノロジー、永久凍土、および後期新生代の北極圏における気候変化」と題した講演があった。Oral presentationでは、世界各地(ニュージーランド、ベーリング海、北アメリカ、ケニヤ、トルコ、エチオピア、フィリピン、インドネシア、日本など)のテフロクロノロジーに関する研究と火山ガラスの微量成分の測定に関する発表などがあった。Oral presentationを含め、国内のテフラ同定ではあまり使用されていない機器でのテフラ同定の発表もあり、近年の機器の進歩に伴ってテフラ同定技術がさらに進歩している印象を受けた。また、前日10日と11日の2日間、Poster presentationが催された。Poster presentationは、テフロクロノロジーを利用した多岐に渡るポスターの展示があった。地域としては、主に、国外が、北極圏、ニュージーランド、ベーリング海、インドネシア、エルサルバドル、スロベニア、スウェーデン、フェロー諸島、アラスカ、韓国、エチオピアなど、国内が、雲仙、都城、琵琶湖、九州、近畿、関東、大山、十和田、太平洋、熊野トラフ、沼沢湖、北海道、屋久島などに関する研究であった。そのうち、堆積物コア試料や考古学に関連したテフロクロノロジー研究が印象に残った。

4日目(5月12日)はOne-day Excursionがあり、上野原縄文の森博物館(霧島市国分)→国分ハイテク展望台(霧島市国分)→道の駅たるみず(垂水市牛根麓：昼食)→黒神川砂防指定地(鹿児島市黒神町)→埋没鳥居(鹿児島市黒神町)→湯之平展望所(鹿児島市桜島小池町)→火口跡と橋脚への土石流跡(鹿児島市桜島小池町)を巡る行程であった。特に、黒神川砂防指定地では、タイミング良く、桜島の小規模噴火の瞬間を観察でき、参加者にとって印象深い瞬間となった(表紙写真)。今年は、特に桜島の活動が盛んであり、2010年5月現在、500回以上の爆発的噴火をしているとのことであった。

5日目(5月13日)もOne-day Excursionがあり、桜島テフラ露頭(垂水市市木光石；高峠)→アジア・太平洋農村研修センター(鹿屋市上高隈町：昼食)→天神段遺跡(曾於郡大崎町野方)→始良Tnテフラ露頭(垂水市新城麓下)を巡る行程であった。個人的には、

最後に訪れた 7.3 cal ka BP の鬼界アカホヤ噴火に伴う地震の際、阿多テフラから大隅降下軽石、入戸火砕流堆積物へと 20 m 以上も上昇した堆積物の跡が見られる Clastic dike が印象的であった。

6 日目 (5 月 14 日) は Oral presentation のみがあった。Keynote Speaker は、中川光弘 (北海道大)、中川 毅 (UK, University of Newcastle) の両氏であり、順に、「テフラシークエンスから推定したカルデラ形成噴火のマグマシステムおよび噴火過程: 支笏および始良カルデラの事例研究」と「水月湖の年縞プロジェクト (2006 年) と日本国内および周辺における高精度テフラ編年」と題した講演があった。

Oral presentation では、主に、噴火災害のハザード、マグマ、考古学、堆積物コアに関連したテフロクロノロジー研究の発表があった。特に、考古学では、テフラが堆積しやす

い地域で、改めてテフロクロノロジーが有効に利用されているとの印象をもった。

その他、会議の印象としては、想像より海外からの参加者が少なかったことや、先述の理由で、霧島火山周辺を巡れず残念であった。2015 年の INQUA が日本で開催されることになれば、霧島火山を巡る可能性もあり、その時に期待したい。

最後に、参加者の 1 人として、“Active Tephra in Kyushu, 2010” 組織委員会の福岡孝昭 (立正大)、森脇 広 (鹿児島大)、鈴木毅彦 (首都大学東京)、井村隆介 (鹿児島大)、長岡信治 (長崎大)、青木かおり (立正大)、David Lowe (Waikato University)、および町田 洋 (東京都立大学) の各氏のご尽力に感謝いたします。その他、霧島市役所、霧島市長、鹿児島大学、鹿児島県埋蔵文化財センターなど、多くの関係者の方々に記して謝意を申し上げます。

## ◆ International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity: “Active Tephra in Kyushu, 2010” Post-conference Excursion 参加報告

国際第四紀学連合 (INQUA) の一組織である International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology (INTAV) の活動の一環として、2010 年 5 月 9 ~ 14 日に標記の会議が鹿児島県霧島市で開催された。本稿では、この会議後の 5 月 15 ~ 17 日に行われた Post-Conference Excursion (以後ポスト巡検) について報告する。

本会議には、11ヶ国から 76 人 (日本からは 42 人) が参加し、前回カナダで行われた “Tephra Rush 2005” の倍近い人数が集まった。会期中の 5 月 12・13 日に開催地である桜島・霧島周辺の巡検が予定されていたため (実際には、口蹄疫のため宮崎県には入ることができなかったのが残念であった)、ポスト巡検はそれら以外の九州の火山を巡るものとなっていた。ポスト巡検には、会議参加者の半分弱の 30 人 (海外から 20 人、日本から 10 人) が参加した。

1 日目 (5 月 15 日) は、会議が行われた鹿児島県霧島市を朝 7 時に出発し、巡検地である長崎県島原市へと向かった。正午前に熊本市と島原市を結ぶフェリー乗り場に到着し、昼食をとりながら島原湾を渡った。雲仙へ到着したフェリー乗り場の向かいには、1792 年に山体崩壊を起こした眉山と、その背後には 1990 ~ 1995 年の噴火で記憶に新しい平成新山がそびえていた。噴火から約 15 年が

石村大輔 (京都大学理学研究科) 経つが、その光景は未だに噴火の記憶を色濃く残していた。参加者の多くは、すでにバスの中から写真を撮影しており、待ちきれない様子であった。

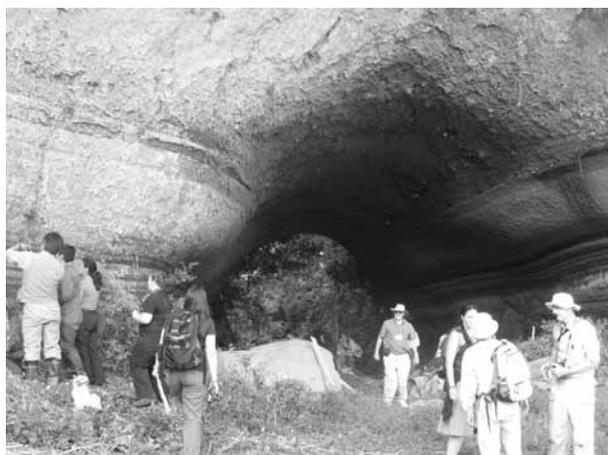
最初の見学地点は、仁田峠であった。展望台からは平成新山や島原湾・橘湾が眺望できた。周辺にはミヤマキリシマが咲いており、天候も良く心地よい陽気であった。次の見学地点である島原市立野町の露頭では、広域テフラである鬼界アカホヤテフラ (K-Ah)、始良 Tn テフラ (AT) に挟まれた雲仙起源の火砕流堆積物や 1990 ~ 1995 年の噴火によるテフラを観察することができた。また、ここでは土器片や黒曜石も見つけることができ、参加者の中にはテフラよりもそちらのほうに夢中になっている方もいた。この露頭は長さが 100 m 程度あり、個々人が露頭を詳しく観察することができ、露頭の前で多くの議論が交わされていた。

その後は、1990 ~ 1995 年の噴火に関する露頭と地形を見て回った。火砕流堆積物の露頭では、炭化した木材や堆積構造を確認することができ、眉山南麓では 1990 ~ 1995 年に発生した火砕流が流下した部分を見渡すことができた。現在でも径数 m の岩塊が残っていたのが印象的であった。帰りは行きと同じフェリーに乗り、雲仙を見ながら島原をあとにした。宿泊地は、熊本県大洲町で

あり、ホテルに着いたのは日も落ちた午後7時過ぎであった。

2日目(5月16日)は、阿蘇山に向かった。中岳へ向かう途中、上米塚に寄りスコリアコーンの断面を観察した。中岳では、駐車場からロープウェイで火口に向かい、噴火口を間近で見ることができた。少し硫黄臭がしたが、天候も良く火口の様子を詳しく観察することができた。帰りは徒歩で駐車場まで向かったが、その間に見える景色は普段火山地形を見る機会の少ない私にとっては非常に新鮮であった。草千里では短時間であったが草千里火口を眺め、参加者は阿蘇山ミュージアムで地質図や記念品をお土産として購入していた。

その後は外輪山へと向かい、大観峰で阿蘇カルデラを一望しながら昼食をとった。参加者は草原の上に座り、初夏の美しい新緑を満喫したと思われる。午後からはテフラ露頭に向かった。道中にもいくつかの露頭が見られ、黒色土壌中にオレンジ色のテフラ(恐らくK-Ah)が挟在しているのを見ることができた。産山村の道路沿いの露頭では、約5万年前以降の阿蘇起源のテフラと広域テフラであるK-Ah・ATを観察することができた。参加者は露頭で直接テフラを観察し、質問やサンプル採取を行っていた。最後の見学地点である竹田市野鹿には、前の露頭よりも古い阿蘇4火砕流堆積物の溶結部(Aso-4B)と弱溶結部(Aso-4A)が道路脇に露出していた。さらに進むとAso-4Aの基底付近をけずって作られたトンネルがあり、下位から阿多テフラ(Ata)、Aso-ABCDテフラ、Aso-4Aまでの地層が露出していた。トンネルの壁面すべてが露頭であり、三次元的に地層を観察することができた(写真)。トンネル上面にはAso-4Aが露出し、普段は観察できない角度から地層を観察することができ非常におもしろかった。この日も日が落ちる頃にホテルへ到着した。



竹田市野鹿に露出する阿蘇4火砕流堆積物(弱溶結部、Aso-4A)とAso-ABCDテフラ。(鈴木毅彦撮影)

3日目(5月17日)は熊本県をあとにし、大分県の九重へ向かった。最初の見学地点である竹田市寺原では、土砂採り場の大きな露頭でテフラを観察することができた。ここでは、Aso-4火砕流堆積物の上の埋没土壌を層厚20m程度の飯田火砕流堆積物が覆う。埋没土壌上面には飯田火砕流堆積物に焼かれたと思われる木材や植物の炭化物が観察された。次の竹田市千人塚では南九州起源のテフラ、阿蘇起源のテフラ、九重起源のテフラを確認することができ、前日までに見てきたテフラとの層序関係がよくわかる露頭であった。ここでは多くのテフラを観察することができ、参加者が熱心にサンプルを採取していた。また、テフラやその間に挟まる埋没土壌の層相がそれぞれ異なり、その成因や堆積過程などの議論が交わされていた。くじゅうロードパーク内の露頭では九重第一テフラ(Kj-P1)以降のテフラを複数確認することができた。ここは眺望もよく阿蘇の外輪山と阿蘇山を眺めることもできた。

お昼には、九重町長者原で九重の溶岩ドームを見ながら昼食をとった。休憩場所の近くで溶岩ドームの崩壊によると考えられる堆積物を観察した。ここでは山体崩壊に伴う流れ山とその構成物を見ることができ、その堆積機構やなぜこの堆積物が高温状態であったと推定されているのかなどの解説が行われ、より詳しい議論が交わされていた。最後の見学地点である由布岳南麓の登山道沿いの露頭では、時間の関係上短時間の観察となったが、K-Ah、九重起源のテフラ、由布岳起源のテフラを観察することができた。

最後に全行程を終えバス内では、巡検案内者であった長岡信治氏、宮縁育夫氏、奥野充氏への感謝とともに巡検の無事終了を拍手で締めくくった。この巡検では、南九州起源の広域テフラ(K-Ah、AT)を鍵層とし、雲仙、阿蘇、九重起源のテフラの層序関係を多くの露頭で確かめることができ、空間的にこれらテフラの広がりを把握することができた。また、私個人としては、普段遠地の広域テフラしか見ることがないため、給源に近接した地域でのテフラ研究のおもしろさや難しさを感じることができた。海外の参加者の方々にも、テフラだけでなく日本の風景や文化を感じるよい巡検になったのではないかなと思う。今回の会議では、会議から巡検まで晴れの日が続き天候に恵まれた。天気予報では巡検期間中は悪天候が予想されたが、当日は快晴であり、多くの参加者の期待と熱意が伝わったのだと思う。

最後になりますが、会議・巡検の企画運営をいただいた組織委員会の方々に御礼申し上げます。

## ◆日本第四紀学会講習会のお知らせ（第2報）

- (1) 講習会タイトルと講師  
 「沖積層：その堆積物・堆積システム・堆積シーケンスの解析法の基礎」  
 増田富士雄（同志社大学）・石原与四郎（福岡大学）・佐藤智之（産総研）・谷口圭輔（同志社大学）・高田将志（奈良女子大学）
- (2) 日程：2010年9月9日（木）午後1時（開始）～11日（土）（午後4時解散）
- (3) 集合・開催場所：同志社大学京田辺校地（〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3）
- (4) 講習会概要：講義と実習を通して、地表地質の解析法の基礎を学ぶ。  
 1) 講義：堆積相解析、シーケンス層序学、沖積層解析の今後  
 2) コアや水路実験や自然露頭での堆積物の観察、柱状図の作成  
 3) ボーリング柱状図での堆積相解析法やシーケンス層序解析の実習
- (5) 参加費：資料代等約3,000円（予定）
- (6) 定員：30名
- (7) 問合せ・申込先：電子メールで高田将志（奈良女子大学；takada(at)cc.nara-wu.ac.jp）まで。電子メールの件名を「四紀講習会申込み（氏名）」とし、本文中に、1) 氏名、2) 所属、3) 電子メールアドレス、4) 連絡先住所、5) 連絡用電話番号、を明記してください。申込みされた方には、申込み受け完了の返信メールをお送りします。
- (8) 申込締切：**2010年8月6日（金）**（第1報の締切を若干延長しました）。ただし、先着順で定員になり次第、締切らせていただきます。

## ◆2009年度第6回幹事会 議事録

日時：2010年6月19日（土）9:20～9:45  
 会場：早稲田大学22号館202教室  
 出席：遠藤、百原、小野、竹村、佐藤、植木、三田村、  
 荻谷、高田、長橋、池原、久保、吾妻、奥村（オブザーバー）、中野（事務局）

議事：  
 1) 第3回評議員会の議事のうち、来年度の評議員会のスケジュールならびに功労賞の選考対象について確認をした。  
 2) 2010年学術大会のうち、とくにポスターサロンの準備について審議した。  
 3) 次回幹事会を7月24日（土）13時から開催し、主に総会資料について審議することを確認した。

## ◆2009年度第3回評議員会 議事録

日時：2010年6月19日（土）11:40～12:55  
 会場：早稲田大学6号館201教室  
 出席：遠藤邦彦（会長）、小野 昭、竹村恵二（以上、副会長）、百原 新（幹事長）、池田明彦、池原研、井内美郎、岡崎浩子、奥村晃史、荻谷愛彦、久保純子、斎藤文紀、佐藤宏之、高橋啓一、陶野郁雄、松浦秀治、三浦英樹、水野清秀、三田村宗樹、山崎晴雄、吾妻 崇（記録）、町田 洋（前会長）、熊井久雄（元会長）、長橋良隆（幹事）、中野利洋（事務局）

議事：

遠藤邦彦会長の挨拶のあと、池田明彦評議員を議長に選出し、下記の審議・報告が行われた。

- 1) 学会賞・学術賞選考委員会の山崎委員から、各賞の選考経緯について説明があり、学会賞3名（岡田篤正会員、吉川周作会員、多田隆治会員）、学術賞1名（鈴木毅彦会員）が選出されたことが報告され、上記候補者に各賞を授賞することが承認された。
- 2) 論文賞・奨励賞選考委員会の岡崎委員長から、各賞の選考経緯について説明があり、論文賞1件（青木かおり会員、入野智久会員、大場忠道会員、48号）、奨励賞2名（谷川晃一朗会員、丹羽雄一会員）が選出されたことが報告された。選考方法の記載について審議があった後、上記候補者に各賞を授賞することが承認された。
- 3) 名誉会員候補者選考委員会の陶野委員長から選考経緯の説明があり、推薦された3名（熊井久雄会員、町田 洋会員、松島義章会員）を名誉会員候補者として決定し、総会にはかることが承認された。なお、選考規定の第5条の表記について再度検討が必要だとの意見が委員会から出され審議し、今後引き続き検討することとした。
- 4) 功労賞について、授賞対象者の整理が必要であることから、今年度の表彰を延期し、引き続き幹事会で検討することとした。
- 5) 来年度の第3回評議員会を地球惑星科学連合大会開催期間中に行う予定であることを確認した。それにあわせて学会賞等の応募や選考のスケジュールを前送りにして実施することとした。
- 6) INQUA 招致準備委員会より活動報告があった。

### ◆第14回尾瀬賞 募集

尾瀬保護財団より、表記の懸賞事業に対する募集案内が来ております。  
詳細および募集要項は同財団のサイトを参照ください。(2010年8月31日締め切り)

<http://www.oze-fnd.or.jp/>

応募用紙の送付先および問い合わせ先

財団法人尾瀬保護財団事務局「尾瀬賞」係

〒371-8570 群馬県前橋市大手町一丁目1-1 群馬県庁内

電話：027-220-4431、ファックス：027-220-4421、Eメール：info(at)oze-fnd.or.jp

#### ★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：荻谷愛彦 (kariya(at)isc.senshu-u.ac.jp) 宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 専修大学文学部環境地理学研究室 荻谷愛彦

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 電話：044-911-1014 FAX：044-900-7814

広報委員：越後智雄・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーのPDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail：daiyonki(at)shunkosha.com 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176